白楽天と住吉明神との邂逅

——十八世紀の日本人における中国文化受容の意識——

張　小鋼

一、はじめに

白楽天（七七二～八四六）は日本文学に最も大きな影響を与えた詩人の一人である。彼の詩文はその存命中に、すでに日本に伝わっていた。人々は朝野を挙げて白楽天の詩文に傾倒し、数々の逸話が今日まで伝えられている。嵯峨天皇と小野篁との間に交わされた議論は、朝廷の人々がいかに白詩に熟知していたかを物語っている。[1] 平安時代には『文集』や『集』といえば、『白氏文集』を意味するほどであった。

また、大江朝綱（八八六～九五七）や高階積善（？～一〇一四）が白楽天を夢に見たというような逸話からも、当時の日本人が如何に白楽天に夢中になっていたかをうかがうことができる。[2] さらに『太平廣記』巻四十八「白樂天」にも、日本人が白楽天の来日を待望していたことを示す記述がある。[3] 以下の通りである。

唐の会昌元年（八四一）に李師稷中丞が浙東の観察使になった。ある商人が台風に遭い、一ヶ月もの間漂流した。ようやく一つの大きな山のある場所にたどり着くと、山には瑞雲や奇花があり、また白鶴や異樹もあり、どれもこの世で見たことのないものばかりであった。山から人が出迎えにきて、「どうやってここまで来ましたか」と尋ねた。そこで商人は遭難の経緯を告げた。出迎えの人は商人に船を繋いで上陸させ、「天師に謁見しなければなりません」と言い、その場所まで案内した。案内された場所は大きな寺院のようで、一

本の道を通ると、一人の道士の鬚や眉の毛がみな真っ白で、大広間の上座に座っているのが見え、まわりに数十人が仕えていた。老人の道士は商人に、「あなたは中国人ですね。ご縁があってよくいらっしゃいました。ここはいわゆる蓬莱山というところです。せっかくいらっしゃったのなら、少し見てみませんか」と言い、部下に寺院内を案内するように命じた。玉の台や翡翠の木はみな目を奪うほど輝かしい。庭や屋敷が数十箇所あり、みな由緒のある名前がついている。ある庭の前に着くと、鍵がしっかりとかかっている。そのため覗いてみると、中庭には花が咲きほこり、広間には蒲団が見え、階段の下にある香炉からは煙が昇っている。商人は「ここの庭はどなたのですか」と尋ねた。案内人は「白楽天のです。楽天はまだ中国におり来ていません」と答えた。商人はひそかに書き留めておいた。そこで別れて帰りの船に乗った。十日後、商人は越に戻ってきた。詳細に廉使（廉政使）に報告した。李師稷はそれを全部筆録して白楽天に送った。

この記述は想像によってふくらませてはいるものの、商人が遭難して日本に漂着することは珍しくない

し、また日本人が白楽天に会いたいともいう心情も一致している。したがって日本人の心情を反映したものと言えるだろう。実際、『白氏文集』には次のように二首の詩が遺されている。[4]

(1)「客有説」

客即李淅東也、所説不能具録其事。（客とは李淅東のことであり、彼の話の詳細はすべて書き写すことが出来ない）

近有人従海上迴、近ごろ人あり　海上より廻る
海山深處見楼臺。海山深き処　楼台を見る
中有仙龕虚一室、中に仙龕（せんがん）ありて一室を虚（なな）しうす
多傳此待樂天來。多くは伝う　此れ楽天の来たるを待つと

(2)「答客説」

吾學空門非學仙、吾は空門を学び　仙を学ぶに非ざるなり
恐君此説是虚傳。恐らく君が此の説　是れ虚伝ならん
海山不是我歸處、海山は是れ我が帰処ならず
歸即應歸兜率天。帰らば即ち応に兜率天（とそつてん）に帰るべし
予晚年結彌勒上生業、故云。（余は晚年仏教の弥

勅に帰依しているので、故にこのように言った）

この二首を見る限り、白楽天は確かに李師稷の報告を受けている。しかも李への返答として詩を書いていた。「答客説」のなかでは、白楽天はこの話はおそらく噂（虚伝）であり、事実ではないという認識を示している。

しかしながら日本が白楽天を受容する過程では、必ずしも白楽天に対し歓迎一辺倒の心情ではなかった。たとえば、謡曲「白楽天」や浮世絵「見立白楽天」にはそのような日本人の反発や対抗しようとする心理が表されている。なぜそのような状況が生じたのであろうか。本稿では、日本人における中国文化受容意識の深層を考えてみたい。

二、謡曲「白楽天」

謡曲「白楽天」の作者については、主に三つの説がある。[5]（1）世阿弥元清（一三六三～一四四三）とする説。（2）世阿弥より後の成立で、その影響を受ける可能性のある作者とする説。[6]（3）世阿弥の作で、信光が補作したとする説。[7]ただし、これらの説はいずれも決め手がなく、作者不明のまま懸案として残されている。

さらに謡曲「白楽天」の完成時期についても不明である。ただし「白楽天」は寛正五年（一四六四）四月十日に糺河原勧進猿楽において上演された。[8]また、謡曲「白楽天」を観世正盛が演じたことがあるという。[9]これらの事実をあわせて考えると、謡曲「白楽天」は少なくとも十五世紀には成立したと考えられる。謡曲「白楽天」のあらすじは次の通りである。

唐の太子賓客白楽天が玄宗皇帝の「日本の知恵を計れ」との宣旨を受け、筑紫の海で住吉明神の化身である漁翁と出会い、詩歌の応酬を行った。白楽天は「青苔衣を帯びて巌の肩に懸かり、白雲帯に似て山の腰を囲る」（青苔帯衣懸巌肩、白雲似帯圍山腰）の詩を歌い、それに対し漁翁は「青苔とは青き苔の巌の肩に懸かりたるが、衣に似たると候ふな、白雲帯に似て山の腰を囲る、面白し面白し、日本の歌もただこれ候ふよ、苔衣、着たる巌は、さもなくて、衣着ぬ山の、帯をするかな」（傍線は筆者）と和歌で答えた。住吉明神は正体を現し、「立ちかへり給へ楽天」と歌いながら、神風を巻き起こし白楽天が乗っている唐船を中国に吹き戻した。最後に伊勢、石清水、賀茂、春日、鹿島、三島、諏訪、熱田、安芸の厳島の神々がみ

な海上に現れ、海青楽を舞い、八大竜王が八音の曲を奏し、「げにやありがたや神と君、げにやありがたや、神と君が代の、動かぬ国ぞめでたき、動かぬ国ぞめでたき」と歌われる中で謡曲が終わる。

この謡曲の白楽天に関連する部分は、完全に虚構に属するものである。第一に、白楽天の作とされる詩は、『白氏文集』には存在せず、偽作である。この詩は古くから『江談抄』巻四に見える都在中と女房の唱和ではないかと指摘されてきたが[10]、これまでの研究によると、その可能性は否定されている。ただし、作者の一人とされる世阿弥は『金島書』「若州」と題した小謡に「青苔衣を帯びて巌の肩にかかり。白雲帯に似て山の腰を廻ると。白楽天が詠めける。東の船西の船。出で入る月に影深き。潯陽江のほとり。かくやと思ひ知られたり」と引用しているので、三村昌義氏は「世阿弥は『青苔』の詩自体を潯陽での詠と考えていたようにも思われる」と推測している[11]。つまりそれに先行した作が存在していたとも考えられるのである。第二に、白楽天の来日についても事実ではなく、虚構のことであることは前掲の白詩を見ても分かる。

また、謡曲の構想は十三世紀の「蒙古襲来」という歴史事件を背景とするものと見られる。「蒙古襲来」とは文永十一年（一二七四）と弘安四年（一二八一）の合戦のことを指している。文永の役では、元軍は総勢三万九千七百人、九百艘余りの軍艦にて博多湾沿岸に上陸し、幕府軍と激戦を繰り広げたが、一夜の暴風雨により元軍の艦船が影も形もなくなり、遠征は失敗に終わった。弘安の役では、元軍は東路軍と江南軍に分かれ、日本を攻めてきた。東路軍は総勢四万人で、艦船九百艘、江南軍は凡そ十万人で艦船三千五百艘である。前回に比べ多勢であったにもかかわらず、やはり一夜の暴風雨により艦船が壊滅の打撃を受け、完敗に終わってしまった。元軍の遠征が失敗した原因はいろいろあるが、暴風雨は偶然であったとはいえ、いずれも暴風雨が元軍の艦船を壊滅させ、幕府軍に劇的な勝利をもたらした。そのため日本人は暴風雨のことを「神風」と称したのである。「神風」は日本に大勝利をもたらしただけではなく、日本人の精神面にも大きな影響を与えたとされる[12]。

謡曲「白楽天」においては、神風を巻き起こした住吉明神も「蒙古襲来」と密接な関係がある。海津一朗氏によると、天野神社の記録では、弘安の役の間、幕府は弓矢や剣などの武具を寄進し、軍の女神丹生明神に祈祷する「異国降伏」を依頼した。そこで、丹生明

神は、神々の軍評定の先陣をすることが決まり、住吉神と八幡神を率いて参戦した。そして「七月二九・晦日、煙と紅の炎が海から噴き上げ、嵐を呼ぶ彩竜が出現するという神変によってついに蒙古の賊船を滅亡させたというのである」という。[13] つまり住吉明神は歌神だけではなく、異国の侵略に抵抗する軍神としてもよく知られていたのである。

このような歴史的背景において虚構された謡曲「白樂天」の主題は、白楽天の漢詩と住吉明神の和歌のやりとりを通し、中国文化に対する強い反発や自国文化の中国文化との対等な立場を強調することにあると思われる。この強い対抗意識は平安時代の白楽天歓迎一辺倒の状況と比べ、様相ががらりと変わっている。ただし、謡曲「白樂天」に対する異なる解釈もある。たとえば、伊藤正義氏は「かくて「文道の祖師」たる白楽天と、歌神たる住吉明神との応酬の中に、必ずしも和歌の優位を強弁するのではなく、むしろ和歌の徳を強調するかたちであるが、それについては、その根底に、歌道の繁栄が聖代の繁栄と一体であり、それが即ち「神と君との道」であるとする『高砂』などに現れた祝言の根本思想と軌を一にするところがあろう」と述べている。[14] 時代が変わるにつれ、主題に対する解釈の変化はありうる。それは研究者の解釈だけではなく、演じる側の能楽師も謡曲「白樂天」に対する理解は数百年前と比べ、かなり変わったと思われる。

謡曲「白樂天」は今日も能の保留曲目として上演されている。自ら白楽天役を演じた能楽師浅見真高氏（観世流職分）がかつて座談会で次のように感想を語っている。[15]

演じてみると、先ほどの、「立ち帰り給へ楽天」ね。表面的に見れば怒りみたいなものを表現するということになるんでしょうけど、本当は怒りじゃないので、日本では白楽天は尊敬しているけど、日本の和歌だっていいんですよ、ただ負けてはいませんよ――そういう心だと思うんですよ。（中略）白楽天に親しみを感じたからこそ、というようなことが、このあたり特に強調されているように思いましたね。ある程度、相手に甘えてないと、こういう態度を出せないわけで、とっても面白いと思いました。

謡曲「白樂天」に先行する作品については、その存在は不明であるが、それよりさらに早い時期に日本人の心情を表すいくつかの記載がすでに存在する。なかには、慈円（一一五五～一二二五）の歌（「から国

や、ことのは、風の吹きくれば、よせてぞ、かへす和歌のうら浪」）に対し、平川祐弘氏は「謡曲『白樂天』にも「うら浪」「帰る」などの言葉が見え、発想が極似しているから、世阿弥は右の慈円の歌を念頭に置いて『白樂天』を書いたのかもしれない」と指摘している。[16] この慈円の和歌を見る限り、「白樂天」成立早期に日本人の反発や対抗心理（優位の心理でなくても）はやはり否めないであろう。

三、浮世絵「見立白樂天」

時代が下り、江戸の明和年間（一七六四～一七七二）、浮世絵師鈴木春信（一七二五？～一七七〇）が白楽天を題材とする一枚の作品を制作した。それがすなわち「見立白樂天」（中判、27.9cm×26.7cm）である。「見立て」とはあることを別のことになぞらえるという手法である。「見立て」は独特の表現手法として江戸時代の歌舞伎や浮世絵などによく使われていた。メトロポリタン美術館浮世絵名品展（一九九五年）の図録の説明によると、この絵は朝鮮通信使を白楽天に、笠森稲荷神社の茶屋の看板娘お仙を住吉明神になぞらえて描いているという。[17] さらに、「見立白樂天」には画面上方の雲形廓線の内に、

苔衣、きたるいわほハ、さもなくて、きぬきぬ山の、おびをするかな。

と書かれているので、この和歌は謡曲「白樂天」を踏まえているものであることがわかる。つまり浮世絵「見立白樂天」は謡曲「白樂天」の内容に基づき描かれたものである。「見立白樂天」の作画の時期は明和年間（一七六四～一七七二）と推定され、題名は後の研究者たちによって名づけられている。

朝鮮通信使とは江戸時代に日朝修好のために李朝が日本に派遣した友好使節団のことであり、慶長十二年

図1　見立白樂天

（一六〇七）から文化八年（一八一一）まで前後十二回にわたって日本に訪れていた。[18] 使節団には正使、副使、従事官、製述官、書記、訳官、写字官と画員などがおり、なかでも正使、副使と従事官は「三使」と称され、地位が最も高かったとされた。製述官、書記、訳官と写字官は中下級の官僚であり、画員は最も地位が卑しい身分とされた。朝鮮通信使一行が来日した様子は、当時残されている数多くの『朝鮮通信使行列圖』よりうかがうことができる。なかでも『正徳元辛卯年朝鮮國之信使』（一七一一）を今回取り上げる。この絵は、正徳元年、時の老中である土屋政直が対馬藩の宗家に記録絵を描くように命じ、それを受け宗家は江戸の町絵師四十人を集め、四つの絵巻を描かせたものである。もしこの二つの絵巻『登城行列』『帰路行列』と春信の「見立白樂天」とを比較してみれば、いくつかの類似点を指摘することができる。

図２　登城行列

まず、春信が描いた朝鮮人の帽子や服は絵巻にある乗馬姿の写字官のものときわめて似通っていること。つぎに船の上に翻っている旗の一部は朝鮮通信使の行列にある清道旗と形名旗の縁と同じ形であること。最後に船の色が朝鮮通信使の官船と同じ赤色であること。旗のデザインや船の色はその人物が朝鮮通信使の一員であることを示し、帽子や衣服のデザインは、その人物が下級官僚であることを示唆している。春信がどのような資料に基づき「朝鮮通信使」を描いたかはよく分からないが、もしかしたら彼が自分の目で確かめて描いたかもしれない。もし朝鮮通信使の来日時期と春信の生卒年を照らせば、彼が二十三歳（一七四八）と三十九歳（一七六四）の頃に、十回と十一回の朝鮮通信使が来日したことがわかる。したがって彼が朝鮮通信使の行列を見学した可能性は十分あると考えられる。実際、春信には他にも朝鮮通信使に関する作品が遺されている。[19] 春信の作品のほかにも、朝鮮通信使が来日した様子は肉筆や版画の浮世絵に数多く遺さ

れている。なかでもよく知られているのは奥村政信、春信の師である西村重長、喜多川歌麿（二代）などの行列図である。

一方、もう一人の人物お仙は江戸時代の有名な美人であり、浅草楊子店のお藤、同じく水茶屋のお芳と共に明和年間の江戸三美人と並び称され、しばしば春信の作品に登場する。

もし、朝鮮通信使とお仙との解釈が成立するとすれば、この絵は、朝鮮通信使の赤い官船がお仙の船の進路を塞いでいる。朝鮮人は船に立ち、右手に一枚の蘭の墨絵をかかげながら、お仙に見せている。同時に彼は左の小指を口元に当てながら、興味深くお仙を見つめている。それに対し、お仙は船上で朝鮮人の視線を避けるように体を横にして立ち、左手で一枚の美人画の掛け軸を通信使に見せようとしている。彼女は右手を口元に当てて恥ずかしそうに流し目で通信使を見ている。

ここでは蘭の絵をお仙に見せることによって、朝鮮人は自分のことを君子であることを表明している。蘭は梅・竹・菊とともに四君子と呼ばれ、高潔な人格を象徴している。一方、お仙はすでに蘭の画意を理解したようで、その回答として美人画を見せている。いわゆる君子・美人という命題であるという話になる。

当時日朝修好の情勢を併せて考えれば、我々は上記のような解釈の合理性を否定することができないであろう。しかし、それを裏付ける資料はまだ不十分であると言えよう。例えば、前掲したように、画中の人物の帽子や服などと朝鮮通信使とのいくつかの類似点を筆者は指摘したが、なぜお仙との淡い恋という構図となったかは、まだ十分に納得のいかないところがある。

ここでは補足説明として一つの資料を紹介したい。それは江戸時代に流行っていた絵手本である。絵手本とは、江戸時代の浮世絵師たちが絵を描くために参考にする資料である。例えば『北斎漫画』はその絵手本の一つである。諸絵手本の中には、白楽天についての資料はそれほど多くはないが、その中に大岡春卜が編纂した『丹青錦嚢』（宝暦三年、一七五三年刊行）に、「白居易琵琶行図」（巻三）がある。

この絵には、潯陽江辺で白楽天が友人と別れる場面が描かれている。注目すべきことは、画面の右側に小船があり、それに乗っている友人が被っている帽子と着ている官服は春信の描いた「朝鮮人」ときわめて似通っていること、また顔の輪郭や鬚も似通っているこ

図3　白居易琵琶行図

と、さらに小船に立っている姿や向きもそっくりである。小船についてもそうであるが、形や大きさも非常に似通っている。画面の左側に琵琶を演奏している茶商人の妻がおり、後のストーリーの展開を示唆している。

白楽天の『琵琶行』は元和十一年（八一六）に作られたのである。彼が四十五歳のときの出来事であった。その前の年、白楽天は九江郡（江州）の司馬として彼の地に左遷されたのである。『琵琶行』のあらすじはこうである。白楽天は友人を湓浦（「湓水」「湓江」ともいう。今日「龍開河」と呼ぶ。江州治下の潯陽県にある）の河口に見送っていた時、隣の船から琵琶の音が聞こえた。その演奏の腕を見るに京の都の人でないとなかなかできないに違いない。問い合わせたところ、やはり長安の妓女で、琵琶の名手であった。かつて穆、曹二名手に師事したことがある。彼女は年を取り、茶商人に嫁ぎ、江州に住むこととなった。数カ月前から、夫が浮梁（ふりょう）に茶を買出しに行ったまま、まだ帰っていない。そこで白楽天は「同是天涯淪落人、相逢何必曾相識」と嘆き、もう一曲を頼み、『琵琶行』という叙事詩を作ることを約束したという。

『琵琶行』より一年前に、白楽天には『夜聞歌者』

という詩があり、鸚鵡洲において隣の船から若い女性の歌を聞いたという内容であった。この二つの詩作のため、後の人々は白楽天と興奴（こうど）（裴興奴のこと。『樂府雑録』巻上琵琶によると、貞元年間の琵琶名手という）との恋愛物語を作り上げたほどである。[20]

この背景において、もう一度二つの作品を比較してみよう。今わかるように春信の「見立白樂天」にある朝鮮人とお仙との邂逅の構図は、まさに「白居易琵琶行図」を参考にするものであった。浮世絵にはお仙の姿がしばしば登場した。中には恋する場面もあった。しかしどれも茶屋という空間に限定するものであった。また朝鮮人の蘭の絵とお仙の美人絵のやり取りも単なる「知恵比べ」だけではなく、二人の淡い恋を匂わせるのは白楽天と興奴との架空の恋愛物語の影が存在しているからである。したがって、春信の「見立白樂天」は朝鮮人とお仙を白楽天と興奴になぞらえるという遊び心もあったのである。それは高度な漢文化の教養がなければ、なかなか思いつかないであろう。その背後には、やはり春信のパトロンである巨川（旗本大久保甚四郎忠舒のこと、一七二二～一七七七）の影響がかすかに見えるであろう。

四、日本人の受容意識の変化

平安時代から江戸時代まで、日本人の白楽天に対する受容意識は、大きな変化を見せた。それは大きく三つの段階に分かれる。すなわち歓迎↓反発↓対話という心情の変化である。なかでも謡曲「白樂天」と浮世絵「見立白樂天」は、日本人の異文化受容に対する心理の重要な一面を示している。それは異文化に反発しながら、日本文化のアイデンティティを示そうとする点である。しかしながら、両者には異文化受容の心理が大きく異なっている点も見逃すことができない。

謡曲「白樂天」の場合には、白楽天はもはや日本に異国の先進的文明をもたらした友好の使者ではなくなり、日本文化にとって脅威となる異文化の象徴的な存在となって、当然ながら歓迎される客ではなかった。そのため、住吉明神は神風を巻き起こし、白楽天の座船を中国本土に吹き戻してしまった。前述したように、住吉明神は歌神であると同時に、外敵から国を守る軍神でもある。謡曲「白樂天」の内容を見る限り、住吉明神の和歌によって友好交流のイメージより、来日を警戒する守護神としてのイメージの方が脳裏に残

される。すなわち異文化から日本文化のアイデンティティを守る、あるいは日本文化によって異文化を打ち負かそうとする心情である。日本人がこのように中国文化に対し排他的態度を謡曲という形ではっきりと表現したのは、初めてのことであるかもしれない。

なお、日本人のこのような心情は、謡曲「白樂天」だけに見られるものではない。たとえば、白楽天と同じく楊貴妃も日本でよく知られている人物である。楊貴妃については日本でも多くの伝説が作られてきた。特に楊貴妃が玄宗の命令で処刑された後、死なずに日本に逃れてきたことは広く知られている。『尾張名所圖繪』によると、今日も名古屋熱田神宮には楊貴妃石塔の址があり、楊貴妃はすなわち熱田大明神であるという。また同じく『尾張名所圖繪』によると、唐の玄宗が日本を侵略する意図があるのを聞き、大明神が楊貴妃に生まれ変わって、玄宗のそばで唐の政治を撹乱することを図った。その後安史の乱が起こり、玄宗が四川に逃げる途中、馬嵬坡というところでやむを得ず楊貴妃を処刑したところ、楊貴妃は日本に逃れ大明神本来の姿に戻ったという。[21] 熱田大明神にこのような伝承がのこっているのは、やはり当時の日本人が、楊貴妃となった大明神を、唐に侵略される危機から日本を救った守護神として見なしていたからである。ちなみに謡曲「白樂天」の最後に熱田明神も他の神々と共に海青楽を舞い、勝利を祝った一員として取り上げられている。

平川氏は「日本人はある時は白楽天の来日を切望して夢にまで見たのだが、しかし漢文化の影響があまりに強くなり、自国の文化的独立や自分自身の存在の意味について危機感を覚えると、空想場裡に白楽天を日本へ渡航させ、空想場裡に勝負して打ち負かし、神風の力でまだ白楽天を唐土へ吹き戻しているのである」と指摘している。[22] 楊貴妃の例もまさにその自国存亡に対する危機感で空想場裡に打ち負かした物語であるといえる。ただし、その空想場裡の勝負は根拠のない無意味なものではない。この勝負という文化事象を通し、「蒙古襲来」という異国からの侵略が、後の日本人にどれほど大きな心理的な影響を与えたかという事実をうかがい知ることができるのである。

一方、「見立白樂天」の場合には、見立てという手法によって中国⇔日本、白楽天⇔住吉明神、唐詩⇔和歌という対立の図式を、朝鮮⇔日本、朝鮮通信使⇔お仙、蘭⇔美人という図式に切り替えたのである。その結果として、謡曲「白樂天」の中国の軍事的、文化的

脅威から国を守るという重い主題は、君子・美人という軽快な主題にすり替わったのである。ここでは春信のもつ浮世絵の遊び心と異文化に対する余裕が示されている。それは十八世紀における、異文化と対等に交流しようとする日本人の心理意識の表れとも言えるだろう。

十八世紀の李朝は、徳川政権と外交関係を持っていた唯一の国であった。朝鮮通信使は来日した際、水路や陸路を利用し江戸に向かったが、途中各地で歓迎を受け、民間レベルの友好交流も多かった。朝鮮の書画が大変高く評価されていたため、沿道の民衆が幕府の禁令を無視して通信使の行列に近づき書画を求める場面もしばしばあり、ときには随行する小童もその求めに応ぜざるを得なかったようである。こうして、朝鮮通信使と日本各階層との友好交流は江戸の人々にとって通信使を身近な存在に感じさせた。春信の絵も、男女の淡い恋心の一瞬の描写を通じて、両国の友好ムードを演出している。さらに、それは日朝両国の間だけではなく、両国ともに中国文化の影響を受けるという共通の文化背景において、中国からの影響が投影されている。とりわけ日本の場合、朝鮮半島経由で中国文化を受け入れることが少なくなかった。したがって朝鮮通信使⇔お仙、蘭⇔美人という構図は、イコール中国文化⇔十八世紀の日本文化という図式と言っても過言ではない。

このような対等的な図式は、十八世紀の日本人の自己文化に対する自信の表れである。彼らはもはや「神風」の力を借りることを必要としない。彼らは白楽天を自分の生活の中に誘い込み、直接に白楽天にアプローチし対話しようとした。たとえば、当時の川柳には、謡曲「白楽天」を題材として、

・何が食いますと樂天そばへより

（『誹風柳多留全集』五篇の十五丁）

・詩學にて来れば歌學にてぼっかえし

（『誹風柳多留全集』四六篇の六丁）

・唐織りの帯はまわらぬ山の腰

（『誹風柳多留全集』六三篇の十八丁）

などの作品がある。庶民の謡曲「白樂天」に対する理解や興味は、明らかに十五世紀の日本人と異なり、異国からの軍事的、文化的脅威の危機感がほとんど感じ取れない。

興味深いことは白楽天と住吉明神との邂逅のなかで、いずれも朝鮮半島が介在していることである。ただし、一つは戦争の記憶――「蒙古襲来」であり、も

う一つは平和の記録――「朝鮮通信使」の来朝である。この二つの題材の扱いによって、その異文化受容の深層意識を表しているのである。

五、おわりに

「知恵を計る」という類の話は、日本にも中国にも存在する。ここでは、日中両国の知恵比べをする「囲碁」をめぐる話を最後に紹介したい。

日本には「吉備大臣入唐」の話がある。この十五世紀頃成立した説話では、吉備真備が遣唐使として唐に入った際、その才能を中国人に嫉妬され、何回か死に追い詰められそうになるが、いずれも彼の知恵と勇気によって難関を乗り越え、帰国を果たしている。そのなかに囲碁をもって勝負を決着するという話がある。勝負の最中、双方は膠着の状態に陥り、なかなか決着がつかなくなった。真備が相手の目を盗んで唐方の黒石を飲み込み、その結果、唐人が負けてしまった。唐人が不審に思い石を点検すると、一個の黒石がなくなっていることに気づいたのである。そこで占師に占わせると、真備が飲み込んだことが分かった。そこで唐人は吉備に下剤を飲ませ、黒石を出させようとしたが、真備は下痢を止める呪術によって黒石を出さなかった。結局、真備に軍配に上がったという。[23]

一方、中国にも同様の話がある。『冊府元亀』には日本の王子が中国の囲碁名手と対局する記述がある。[24] あらすじは次の通りである。

唐の大中二年（八四八）日本国の王子が唐土に入った。王子は囲碁を打つのが得意なため、宣宗が囲碁の第一の名手顧師言に王子と対局するよう命じた。王子が二十三回目の石を打った時、顧師言は君命を辱めることを懼れて、手に冷汗をかきながら、慎重に石を打っていた。やっとのことで勝ったが、王子は負けたとはいえ、満足せず「今の人は何番目の名手でしょうか」と尋ねた。担当官は「三番目です」と答えた。すると王子は「一番目に会いたい」と言った。担当官は「三番目に勝ったら二番目に会うことができます。二番目に勝ったら一番目に会うことができます。いま性急に一番目に会ってはいけません」と断った。そうすると、王子は「小国の一番目が大国の三番目に勝てないということは今よく分かりました」と嘆いたという。『冊府元亀』は北宋の真宗（九九七～一〇二二在位）の勅命により王欽若らが中国の歴史事実を部門別に編纂したものである。したがって囲碁の話に基づく

史実があるものと思われる。

この二つの話は日中両国の不信と対立の心理を囲碁の対局を通し、生々しく描いている。特に「蒙古襲来」という特定の歴史背景に、謡曲「白楽天」の白楽天と住吉明神との邂逅は、相互不信と対抗の心理により残念な結果に終わってしまった。

一方、十八世紀の日本は社会が安定し、経済が繁栄していた時期である。江戸の商業経済の発達は、町人文化の花を咲かせ、その文化を代表する浮世絵にも、自国の文化に自信に満ち溢れ他国の文化に寛容な態度が示されていた。春信の「見立白楽天」はまさに彼らの心情の表れである。ただし、不信と対抗の心理は簡単には消えることがないであろう。才子と佳人との間に淡い恋が生まれそうだが、はたしてお仙が朝鮮通信使の夢を見るだろうか。

注釈

(1) 梅洞林愨撰『史館茗話』(『日本詩話叢書』第一巻、龍吟社、一九九六年復刻、三二一頁)に次のように記している。

閣を閉ぢて唯聞く朝暮の鼓　楼に登りてい遥かに望む往来の船

河陽館に行幸す　弘仁御製

故賢相伝へて云はく、「白氏文集の一本の詩、渡来して御所に在り。尤も秘蔵せられ、人敢へて見ることなし。この句はかの集にあり。叡覧の後、すなはちこの観に行幸せられ、この御製有るなり。小野篁を召して見せしめたまふに、すなはち奏して曰はく、『『遥』をもつて『空』と為さば、いよいよ美かるべし」といへり。天皇大いに驚き、勅して曰はく「この句は楽天の句なり。汝を試みたるなり。本は『空』の字なり。今汝の詩情は楽天と同じきなり」とのたまへり。文場の故事、尤もこの事に在り。よりて書す」とある。

(2) 大江朝綱が白楽天を夢見た記述については林愨『史館茗話』(『日本詩話叢書』第一巻、龍吟社、一九九六年復刻、三二六頁)に次のように記している。

朝綱愛白楽天文章、慕其為人、一夕夢與楽天遇接語、従此文章日進。(朝綱、白楽天の文章を愛し、其の人と為りを慕ふ、一夕夢に楽天と遇ひ語を接す、此れより文章日に進む。)

また、高階積善の白楽天を夢見る記述については、『本朝麗藻』巻下(覆刻本『日本古典全集』「懐風藻　凌雲集　文華秀麗集　経国集　本朝麗藻」、現代思想社、昭和五十七年十月、二三一～二三二頁)「夢中同謁白太保元相公」に、「二公身化早為塵。家集相傳屬後人。清句既看同是玉。高情不識又何神。(白太保傳云。大保者是文曲星神。而相公未見其所傳矣)。風聞在昔紅顔日。鶴望如今白首

辰。（余少年時。先人對以常談元白之故事）容鬢宛然俱入夢。漢都月下水烟濱。」とある。

（3）『太平廣記』第一冊（中華書局、一九六一年、二九九頁）

（4）『白居易集箋校』第四冊（上海古籍出版社、一九九八年、二五三八～二五四一頁）

（5）伊藤正義「各曲解題　白楽天」（『謡曲集下』、新潮日本古典集成、新潮社、一九八八年）

（6）竹本幹夫「作品研究　白楽天」（『観世』五十一巻二号、檜書店、一九八四年）

（7）伊藤前掲論文

（8）伊藤前掲論文

（9）竹本幹夫「能における漢詩文の受容」（『中世文学と漢文学Ⅱ』和漢比較文学叢書第六巻、汲古書院、一九八七年）

（10）『江談抄』第四の（七）（『江談抄　中外抄　富家語』、新日本古典文学大系三十二、岩波書店、一九九七年、一〇八頁）には、次のような内容がある。

白雲は帯に似て山の腰を囲り　青苔は衣の如く巌の背に負はる　在中（かなか）の詩

こけ衣着たる巌はまびろけて衣着ぬ山の帯するはなぞ女房

（11）三村昌義『能における白居易の受容』（『白居易研究講座』第四巻、勉成社、一九九四年、二一四～二三三頁）

（12）これについて、川添昭二氏は『蒙古襲来　その勝因の真相』（『日本史の謎と発見』六、毎日新聞社、一九七九年、一八二頁）に次のように指摘している。

「神風」は両度の合戦にそれぞれ、とどめを刺したが、それだけに中世日本人の思想状況を大きく変えた。「神風」の「風」は、神が物理的に吹かした風ではなく、「神」のはたらきそのものであり、彼我の神々の神戦によって、つまり神風によって日本は勝利した、というのが「神風」の内容である。異国降伏の祈祷は全国の一宮、国分寺をはじめ各主要社寺で継続的に行われたから、それらの社寺は異国降伏にまつわる社伝、寺伝を再生、再編ないし新生させてその歴史と効験を強調し、ひろく民衆の間にそれを内在化させていった。

日本国土を神聖視する土俗的、日常的な神祇信仰を内実とする神国思想は、外寇を契機として宗教的信念に高められたのである。いっぽう日蒙交渉の開始以後、元に対して対等の立場を確保する必要上、天照大神以来、その神孫が皇位を継承するとの「神孫君臨」の神国思想が強まった。

（13）海津一朗『蒙古襲来』（吉川弘文館、一九九八年、一四九頁）

（14）伊藤前掲論文

（15）「特集・座談会：「白楽天」をめぐって」（『観世』第五十一巻第二号、一九八三年九月）

（16）平川祐弘「漢文化と日本人のアイデンティティ――特に白楽天の受容を通して――」（『教養学科紀要』第七号、東京大学、一九七五年、一一〇頁）

（17）神谷浩「作品解説」（図録『メトロポリタン美術館浮世絵名品展』、名古屋博物館・中日新聞社・東海テレビ、一九九五年、一八七頁）

(18) 李元植「朝鮮通信使一覧表」(映像文化協会編『江戸時代の朝鮮通信使』、毎日新聞社、一九七九年)

(19) ボストン美術館蔵『朝鮮人行烈』(宝暦十四年)、(図録『青春の浮世絵師鈴木春信――江戸のカラリスト登場――』千葉市美術館・山口県立萩美術館、二〇〇二年、三六頁)

(20) アーサー・ウェーリー『白楽天』第九章注(9)(花房英樹訳、みすず書房、二〇〇三年、二八〇頁)

(21) 林英夫『尾張名所圖會』(『日本名所風俗図会』六「東海の巻」、角川書店、一九八四年、九七頁)

(22) 平川前掲論文、一一五頁

(23) 「江談抄」第三(新古典文学大系三十二、岩波書店、一九九七年、六三頁)

小松茂美「『吉備大臣入唐絵巻』考証」(『吉備大臣入唐絵巻』日本絵巻大成三、中央公論社、一九七七年)

(24) 『冊府元亀』巻九九七(「外臣部・技術」)

図録

1 『メトロポリタン美術館浮世絵名品展』(名古屋市博物館、一九九五年)

2 『宗家記録と朝鮮通信使展』(朝日新聞社、一九九二年)

3 『丹青錦囊』(序文は寛延二年〔一七四九〕、刊行は宝暦三年〔一七五三〕、独立法人国会図書館蔵本)

付記：本稿では、鈴木重三先生の許可をいただき、先生所蔵の浮世絵を使用させていただきました。